



駒澤大学経済学部准教授  
慶應義塾大学SFC研究所上席所員

## 井上智洋氏に聞く

# 生成AIは雇用を奪うのか ブルーカラー労働者の 賃金アップが必要になる

チャットGPTなどの登場により、誰もが簡単に生成AIを使えるようになった。ホワイトカラーの仕事が生成AIに奪われるとの懸念も広がるなか、生成AIが雇用に与える影響について、マクロ経済学を専門とする経済学者の井上智洋氏に尋ねた。

### チャットGPT登場のインパクト

——いよいよAIの時代がやって来たように見えますが、いかがでしょうか。

そうですね。チャットGPTが代表例ですが、「汎用AI」と呼ばれることもある、人間に近い知的作業を実現するAIの登場により、いよいよAI時代が到来したといえるでしょう。

ただし、チャットGPTは汎用AIの原初的なモデル、赤ちゃんみたいなもので、これから立派なAIに育っていくものと捉

えています。つい最近では、画像認識、コミュニケーション、文章・資料の作成もできるようになって、着々とそのタスクの幅を広げています。汎用ロボットではないので、部屋の掃除や植物の水やりはできないのですが、パソコンでできることは何でもこなせる「スーパー有能な部下」のようになっていくと思っています。

——ちなみに、井上先生はチャットGPTをご活用なさっていますか。

検証を兼ねてしばしば使用しています。自分が文章を書くときのたたき台として、とりあえずチャットGPTに原稿を書かせ

たり、その逆に、自分が原稿を書いた後に、同じテーマでチャットGPTならどう書くのか試してみたら、自分より上手だったり……。シンギュラリティがすでに到来している実感する場面もあります。

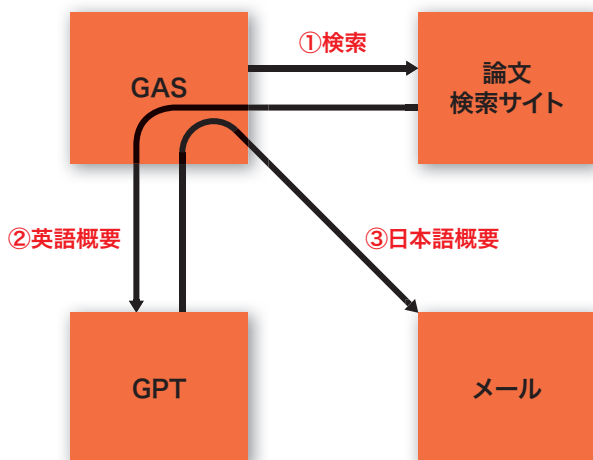
人間の知性をAIが凌駕する「シンギュラリティ」は、ある一定の時点で訪れるわけではなく、将棋に限ってはAIが人間に勝つというように、分野ごとに徐々に訪れるものです。この瞬間にAIが人間を超えた、2045年に超えた、ということではなく、日々、いろんな分野でシンギュラリティが起こりつつあると実感します。

——井上先生ご自身は、チャットGPTを有能な部下であると認識していますか。

そうですね。たとえば、人間は、メールのやり取りに時間を取られていないで、創造的なことに頭を使ったほうがよいと思っています。AIがメールの文面を提案してくて、人間は微修正と送信をするだけ、というようになっていくと思います。いまのところは実現に至っていませんが、技術的にはすでに実現可能です。

いま、実験として、他のアプリケーションを外部から呼び出して使う仕組みであるAPIを利用して、チャットGPTとLINEをつなぐということを学生と一緒にやっています。あるいはGAS（Google Apps Script（Googleのプログラミング言語））を使って、テーマに沿った論文の概要を自動で取得し、GPTに翻訳させてメ

図表1 GASを使ったGPTとメールの連携



ールで通知するといった、人間の手間を減らす仕組みをつくっています（図表1）。最終的に人間が判断しなければいけないこと、たとえば経営やプロジェクトなどの戦略策定や、創造的な作業などにもっと没頭できるような環境づくりを試行錯誤している最中です。

—— これまでもAIは利用されてきました。それらと、チャットGPTをはじめとした生成AIとの違いはどこにあるのでしょうか。

特に、チャットGPTの登場により、AIが民主化されたことにあると思います。第3次AIブーム（2016年頃）の頃から、画像生成AIのようなものが出始め

てはいました。敵対的生成ネットワークという技術を使った、架空の人物の画像をつくって売するようなサービスがありました。ただしそれは、専門家でないと思えないものでした。いまでは専門的な知識がない個人でも、架空の人物の画像をつくれるようになりました。私はAIが「DIYテクノロジー」になったという言い方をしています。日曜大工と同じような感覚でAIを使って画像や物語をつくるのが、素人でも簡単にできてしまいます。

中小企業でも、資金や人材に余裕がないなかでAIを導入するとなると、以前はかなりハードルが高かったのが、いまではパソコンに少し詳しい人が1人いれば、多少の勉強でそれなりの仕組みを構築できてしまいます。プログラミングの知識までは必要ないので、中小企業にとってはかなり導入しやすくなったと思います。

## 生成AIが雇用に与える影響

—— 企業が生成AIを活用するにあたって、生成AIが得意とする作業や、反対に苦手とする作業は、どの辺りでしょうか。

ゆくゆくは、あらゆる書類作成を自動で行なってくれるとよいのですが、いまはそこまでのことはできません。商品を出し出すときのキャッチコピーのアイデア出しには活用できるでしょう。私も先日、学生と一緒につくっているWEBサービスに関す

るキャッチコピーの作成をチャットGPTに頼んだら、瞬時に複数案を出してくれました。もちろん発想力のある人なら、チャットGPTよりよいコピーをつくれるとは思いますが。

中小企業でも、宣伝用のチラシをつくることがあると思います。そのチラシのキャッチコピー部分をチャットGPTにつくらせ、画像の部分画像生成AIにつくらせて合体するというくり方だと、プロに任せて何日もかかるようなものが2時間ぐらいでできるので、今後はそういう使い方も可能性としてはあります。

—— 分野ごとにはすでにシンギュラリティが発生しているというお話でしたが、今後、具体的になくなる雇用や業務があったりするのでしょうか。

クリエイター職においては、すでに雇用への影響が始まっています。たとえば中国のゲーム制作会社では、いままではイラストレーターに発注していたイラストを、画像生成AIにつくらせてその修正をイラストレーターにお願いするようになっていきます。イラストレーターにしてみれば、それでは仕事量が少ないし、報酬も少ないので、困窮する人が増えています。

日本はAIの導入が遅いのと、義理人情もあるので、すぐには発注をやめるといったことはしません。その点、アメリカや中国はドラスティックなので、すでに雇用への影響が出始めているわけです。

## 井上智洋氏に 聞く

アメリカではカウンセラーの仕事が奪われ始めています。1970年頃にイライザというセラピストのプログラムがありました。決められたパターンに従って応答するだけで、何の知恵もない人工無能と呼ばれるものですが、それでも癒される人がいました。何十年も前でもそのレベルであれば、チャットGPTレベルだと、人の悩みを聞くぐらいのことはできてしまいます。他には、脚本を生成AIに書かせる試みがあつて、脚本家などはそれに反対するデモを起こしたりしています。

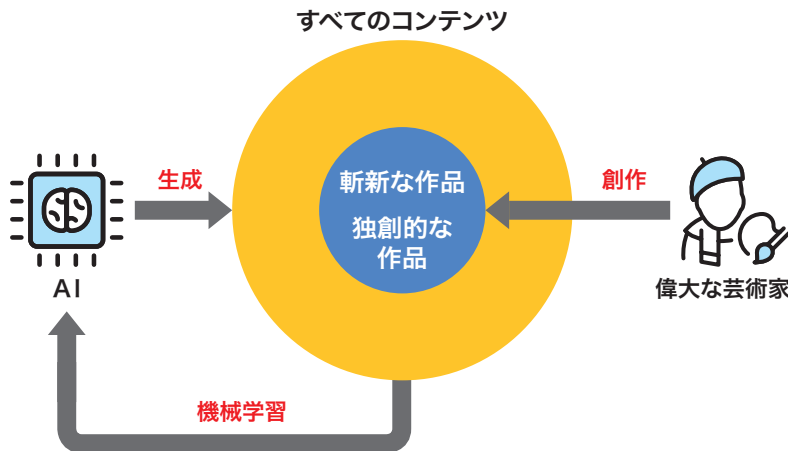
これからは、事務職と専門職も脅威にさらされると思いますが、実際に失業するかどうかは雇用形態によるでしょう。たとえば、技術的にはもう少しで可能ですが、大学教員と同じようなことができるAIが現れても、すぐ解雇することは日本ではできないので、結局雇用は維持されるのではないかと思います。

### 生成AI時代を生き抜くためには

——生成AIは授業もできる、イラストも脚本もつくれる、カウンセリングもできるとなると、人間はどのような生き方をしていけばよいのでしょうか。

生成AIが生み出せないような新しい表現やアイデアを生み出すのが1つの手です。生成AIは一見人間を凌駕して見えるように見え、平均的な人間の能力を超える可能

図表2 「偉大な芸術家」と生成AIの関係



性も大いにありますが、生成AIの生成物の元ネタをつくっているのは人間です。たとえば、ゴッホはゴッホっぽい絵を最初につくったから偉いのであって、生成AIが新しいスタイルを生み出せるかという点と難しいです。アイデアや表現のオリジンは過去の偉大な芸術家がつくっていて、生成AIは真似たり加工したりしているに過ぎません。偉大な芸術家を超えるのは仕組み上、不可能です（図表2）。

もう1つは、ディレクターとしてAIを使いこなすことです。

資本主義社会における労働者は、いままでスキルの競い合いをやっていました。スキルを伸ばして、会社に入ったら上司の言うことを着実にこなす人間を育ててきたわけですが、これからはスキルの競い合いではなく、ディレクション力の競い合いになると思います。

自分がディレクターとしてAIに指示を出すには、そもそも何をやりたいかが大事になってきます。極端な話、有能なディレクターが1人いさえすれば、AIを使ってアイデアや企画を実現できます。

生成AIがスキルの面を補うようになっていくので、スキルが労働市場における価値を失っていきます。AIを使えば済むことが増えていき、スキルの競い合いからディレクション力の競い合いにゲームチェンジが起きます。誰もが偉大な芸術家にはなれないように、ディレクション力は努力で補えない分、格差が拡大していきます。

### ホワイトカラーの危機と労働力の移動

——これからホワイトカラーの仕事は、どのように変わっていくのでしょうか。

悲しいことですが、ホワイトカラーの危機と呼ばれるものが、あと数年以内にやってくると思います。

ホワイトカラーの仕事が続けるには、1





いのうえ ともひろ氏 ●1997年慶應義塾大学卒業、IT企業を経て2011年、博士（経済学）。2017年から駒澤大学経済学部准教授。専門はマクロ経済学。主な著書に『AI失業：生成AIは私たちの仕事をどう奪うのか？』『人工知能と経済の未来』など。

つはAIには負けない能力、特にディレクション力を磨くことです。いまの生成AIは指示されて動くので、指示するほうに回ればよいということです。

それ以外には、AIが取りこぼした仕事をするしかありません。AIが独り立ちして何でもやってくれるように見えて、実は裏では人間が動いていることがあります。そうした仕事を「ゴーストワーク」といいます。それらの多くは「ギグワーク」と呼ばれる単発的な仕事です。

先ほどお話した、生成AIがつくった画像を微修正するという仕事も、ある意味、ゴーストワークであり、ギグワークです。雇用は不安定かつ報酬が少ないのが特徴です。特殊な能力が求められることはなく、誰でもできるような仕事なので、安く買い叩かれる可能性があります。ディレクション力を発揮して多くの金銭を得る人たちと、少量のゴーストワークをやって、細々

と生活を送る人の二極化が起き、格差は開いてしまうと思います。

1つの選択肢として、ブルーカラーに労働力を移動させるという方法があつて、私はこれを推進すべきだと思っています。大学を卒業したらホワイトカラーの職に就くという固定観念がありますが、私はエッセンシャルワークの賃金と地位を適正な水準に引き上げるべきであると思っています。

介護士、保育士、看護師の賃金には、公定価格（実態調査等を踏まえて政府が定める報酬額）が影響しています。介護士はいま、公定価格の見直しにより賃金の改善が図られていますが、このレベルでは不十分です。賃金の大幅なアップを図らないと、ホワイトカラーからブルーカラーへの大移動は起きません。もう少しブルーカラーに労働力を集めないと、日本経済全体は立ち行かなくなるでしょう。

——雇用を守るためにはホワイトカラーからブルーカラーへの移動が必要で、そのためには政治主導で賃金アップを図らないといけない、ということですね。

公定価格で変えられるところは、政府がもっとお金を出せばよいのです。それについて他の業種も賃金が伸びていく可能性もあるし、政府がホワイトカラーからブルーカラーへの価値観の転換を図るように指導的に発言をしていくべきだと思います。

それでも雇用は不安定にはなると思うので、労働市場のミスマッチを解消したうえで、最後の最後にベーシックインカムを導入も検討の余地があるかもしれません。

——生成AIを導入すると仕事がなくなるのであれば、あえて導入しない、という企業がでてくるかと思っています。

そうですね。それは、日本でAI導入がなかなか進まない理由の1つでもあります。日本では労働者の解雇は難しいので、AIを導入して省略化を図っても、人件費等のコストは結局削減できないためです。

そういう意味で言うと、日本ではアメリカや中国ほどあからさまなAI失業は起きないとは言えますが、日本では新しい技術を導入するときに新規採用を抑える傾向にあります。

銀行はフィンテックによって、一足早く雇用を減らしています。2018年には30万人ほど銀行員がいたのが、現在27万人くらいです。あらゆる業種がホワイトカラーに関して新規採用を抑えると、AIによる就職氷河期が到来する可能性もあります。それで経済が停滞したら本末転倒です。

ただし、企業の本音としては、高年齢労働者を少しでも早く退職させて、AIを使いこなせそうな若年層を積極的に雇いたいというところではないでしょうか。あからさまな失業は増えないにしても、一部で早期退職が増えたり、それでも過剰になつてしまった労働力の削減が追いつかない場合は、やはり新規採用を抑えたりする動きが出てくるのではないかと思います。